

# 中世英語散文の文体とペアワード — Julian of Norwich と Margery Kempe

青木 繁博

Prose Styles and Paired Words: Julian of Norwich and Margery Kempe

Shigehiro Aoki

中世における2人の女性、Julian of Norwich と Margery Kempe については、これまでも多くの比較・対照がなされてきた。彼女らは並び論じられることが多く、Margery Kempe に関する研究、例えば Yamaguchi では Hilton、Rolle そして Julian of Norwich らの名が挙げられている(3)。他方 Julian に関する研究でも Margery Kempe らの名が(多少の異同はあるが)挙げられるのだが、こうした例については Baker の Introduction の記述(xix)など枚挙にいとまがない。また2人を並べて論じながらも“their aims and attitudes, as expressed in their respective writings, are strikingly dissimilar”(Bradford, 153)とするものもある。このような研究は、Julian of Norwich と Margery Kempe、同時代人であり直接の面識もあった両者に深い関連性を認め、それぞれの著作を比較して共通点・相違点を探るものであった。

Julian と Margery それぞれの著作に関して、特にその文体を比較して研究したものとしては、Wilson による評価と Stone による反論を見ることができる。Wilson は、Margery の文体についてはいわゆる修辞学的な技法が少ない点などから、単調な文体であり、Julian の文体に劣るとしている(110)。これはペアワード(Stone の用語で言えば paired words、ここではすなわち同意語などが結び付けられた表現技法)を Margery の文体の単調さの直接の原因としている訳ではないとも思われるが、これをとらえて Stone は、Margery に頻出するペアワード表現を、Wilson が文体の単調さと結び付けていると批判し、また Wilson が高く評価する Julian にも、Margery 同様にペアワードが頻出するとしている(123)。Stone はさらに、ペアワードをはじめとするいくつかの同種の表現は、文体においてバランスやリズムを生み出すものとしており(133)、ペアワードを単調さの原因ではなく、むしろ Margery の文体の単調さを補うものとして位置付けている。

本稿では Wilson と Stone の研究を踏まえ、Julian、Margery それぞれにおけるペアワードと文体の関連を探るべく、以下の4つの考察を行なう。

考察1 Julian におけるペアワード表現と他の表現技法との関係

考察2 Julian と Margery、ペアワードの頻度と分布の比較

考察3 Julian における特徴的なペアワードについて、詳細や内容との関連性

考察4 Margery を通して見た Julian の言葉と、ペアワード表現

## テキストに関して

テキストについては、以下の版を適宜使用する。なお本稿では Julian については Long Text を、Margery については Book 1 を主な考察の対象としている。引用箇所における書名などの記載についてはそれぞれの編者名によって略するが、詳しい書誌情報については巻末の参考・参照文献リストを参照されたい。

引用文中に thorn や yogh がある場合は、7 や 3 にて代用する。ペアワードを引用する際には関連する語句をイタリックにて表記し、それに続く括弧には 頁/行 を記述する。ただし電子テキストでは行のみの記述となり、また Colledge and Walsh については当該テキストにおける記述に従う。

併せて Julian に関しては、元となった写本についてもここで簡単に整理しておく。

Julian of Norwich:

Baker ( *The Showings of Julian of Norwich*, Paris Manuscript に基づく )

Colledge and Walsh ( *A Book of Showings to the anchoress Julian of Norwich*, Paris Manuscript に基づく )

Crampton ( *The Shewings of Julian of Norwich*, TEAMS Middle English Texts に電子テキストとしてアップロードされているもの、Sloane Manuscripts No. 2499 に基づく )

Glasscoe ( *A Revelation of Love*, Sloane Manuscripts No. 2499 に基づく )

Margery Kempe:

Meech and Allen ( EETS 212 )

Staley ( 1996, TEAMS に電子テキストとしてアップロードされているもの )

## 考察1

既に述べたように、Margery にはペアワード表現が多く、対する Julian には少ないとする見方は、Stone が強く批判している点の1つである。Stone は自著の第V章、Syntax: Merits and Monotony において Julian に見られるペアを数多く取り上げ、Julian と Margery について、Wilson をはじめとするそれまでの偏った見方に反対している。

このように Julian にも多く用いられているはずのペアワードが、これまであまり認められていなかった経緯は確認されるのだが、その理由の1つとしては、Wilson を含めた先行研究において、ペアワードという観点からではなく修辞学的な観点から Julian の著作を論じていたために、ペアワード表現が見過ごされがちであったのではないかと推測される。この考察1では、Colledge and Walsh の詳細な表現技法の分析を基にして、修辞学的な表現とペアワード表現との関係について、それらが別のものであるのではなくむしろ性質が重なる点などを示したい。

Colledge and Walsh では脚注や巻末などに、本文中に現れた表現技法、特に修辞学的な文彩 ( rhetorical figures ) についての詳細な言及が見られる。その中で特にペアワード表現と深く関連していると考えられる文彩は、 *tautologia*、 *conduplicatio*、 *interpretatio* の3つである。なお Colledge and Walsh の Appendix: Rhetorical Figures Employed by Julian における修辞学的な文彩の用語解説の元となっている、Caplan, Harry, ed. ( *Cicero* ) *ad C. Herennium de ratione dicendi* ( *Rhetorica ad Herennium* ) London, 1954 および “ Frances Nim ’ s unpublished notes ” ( Colledge and Walsh, 735 ) の2点は残念ながら未見である。

Julian:

Colledge and Walsh

His clothynge was *wyde* and *syde* and full semely, as fallyth to a lorde. ( 523.121 - 122 )

*wyde and syde*: . . . the terms are synonymous, but the tautology is ancient and traditional.

. . . The rhetoricians called the figure *tautologia*. ( 523.121 note )

ここでは、ペアワードとも受け取られる *wyde* and *syde* が、 *tautologia* という文彩であると説明が加えられている。この *tautologia* については、Colledge and Walsh の Appendix では特にその定義などは示されておらず、 *depe deynesse* などの例示に留まっている ( 747 )。この例示では、and など結び付けられているペアワードの形を説明することはできない。

実は、ここで *tautologia* の例として挙げられた *wyde* and *syde* は、Appendix では別の文彩、 *conduplicatio* の例としても挙げられている。 *Conduplicatio* の方の定義としては、以下のような記述がある。

#### *Conduplicatio*

‘ Repetition of one or more words ( or synonyms ) for amplification ( Nims )( 738 )

このような1つの表現に対する複数の捉え方は、 *wyde* and *syde* という用例が持つ2つの側面、ひいてはペアワードが持つと考えられる2つの側面に対応していると考えられる。すなわち、一方では冗長的 ( tautology ) であり、ともすれば余分な表現として切り捨てることもできるのだが、他方では余分であるからこそ、何らかの効果を狙った技法であるとする考察のあり方である。

用語の違いは別として、 *conduplicatio* については、その指し示すところがペアワードに近いものがあると考えられる。同意語が組み合わされている点について、Shibata に見られる *synonymic pairs* という用語にある方向性と一致しているように思われる。

また Colledge and Walsh によると、別の技法である *interpretatio* も同じ意味の言葉が結びつけられたもので、こちらも *synonym* が組み合わされたペアワード、特に同意語が組み合わされて語の意味を説明するとされるペアワードの典型的な解釈に近い性質を持つ。

#### *Interpretatio*

‘ The figure which . . . replaces the word that has been used by another with the same meaning ( Caplan, 325 )( 743 )

この *Interpretatio* が多く用いられている例としては以下が挙げられている。

Colledge and Walsh

And truly and verely this marvelous ioy shalle he shew vs all when we shall see hym.  
And thys wille oure good lorde that we beleue and trust, ioy and lyke, comfort vs and  
make solace as we may *with* his grace and *with* his helpe, in to the tyme that we see it  
verely. ( 314.49 - 315.52 )

ここにはいずれも中世英語に広く見られるような、比較的オーソドックスな類のペアを5つ指摘することができる ( *truly* and *verely*, *beleue* and *trust*, *ioy* and *lyke*, *comfort* vs and *make solace*, *with* his *grace* and *with* his *helpe* )。

このように、修辞学的な用語で説明された様々な用法や用例についても、中世英語のコンテキストでペアワードとして扱った場合には別の面が見えてくるケースが多い。こうした視点から Julian の文を見渡すと、Stone がその著作を通じて論じたように、やはり Julian においても Margery と同様にペアワード表現が多いとすることができるだろう。

## 考察2

ペアワードの頻度に関して、数値および割合 ( ページに対するペアワード数 ) などについては Koskeniemi ( 1968 ) に分析がある。また 谷 では Koskeniemi ( 1968 ) も踏まえ、‘ Wooing Group ’ における「ワードペアの生起度数」について考察が加えられており、それによると1ページあたりのペアの数は、テキストにもよるが 0.8~4.4 ということであった ( 20 )。

ペアワードのような表現が、例えば1章の中でいくつ以上あれば読者は「多い」と感じるのか。場合によっては「冗長に過ぎる」といった印象を受けるのか。もちろん基準は明確ではないのだが、この考察2ではペアワードに係る部分を視覚的に捉えることを通じて、ペアワードの頻度について考えてみたい。

この考察では電子テキスト ( それぞれ Crampton, Staley ) を用いて Julian と Margery のペアワードの分布を比較する。比較するのはいずれも序盤、両者が病の中でヴィジョンを得たことについて書かれた部分とし、内容に共通性を持たせている。Julian については Chapter 2 と Chapter 3、Margery については Chapter 1 を抜き出したが、Julian を2章分としたのは、それらの内容の継続性に加えて、そうすることによって比較対象である Margery との間で単語数などを近づけるためである。以下、それぞれについてペアワードに係る箇所を強調し、図式化した分布図を提示する。なお分布図において、強調した箇所にあるペアの内訳は以下の通り。

Julian:

*bodily* and *ghostly*  
*dreds* and *tempests*  
three *dayes* and three *nights*  
two *dayes* and two *nights*

Margery:

*bred* and *watyr*  
*seke* or *dysesyd*  
*vexid* and *labowryd*  
*pullyng* hyr and *halyng* hir

*better* and *longer* tyme  
*knoweing* and *lovyng*  
 so *little* and so *short*  
 by my *reason* and be my *feleing*  
 thy *maker* and *Saviour*  
*minde* and *felyng*  
 bodily *sight* nor *sheweing*

...11ペア

*nygth* and *day*  
 hyr goode *werkys* and alle good *vertues*  
 many a *reprevows* worde and many a  
*schrewyd* worde  
*bowndyn* and *kept*  
*day* and *nygth*  
*skapyd* ne *levyd*  
 most *semly*, most *bewtyuous* and most  
*amiable*

*hastyli* and *qwykly*  
*fayr* and *esly*  
 in hir *wytty*s and in hir *reson*  
*mete* and *drynke*  
 Hyr *maydens* and hir *kepars*  
*tendyrnes* and *compassyon*  
*mete* and *drynke*  
*wysly* and *sadly*

...19ペア

Julian( Ch. 2&3 )  
 単語数 1099  
 行数 73

Margery( Ch. 1 )  
 単語数 932  
 行数 59

Julian's text is a dense Middle English manuscript. It contains 1099 words and 73 lines of text. The text is written in a Gothic script and is a translation of the works of Julian of Norwich. The text is a collection of mystical writings, including the 'Revelations of Divine Love'. The text is written in a simple, direct style, and is characterized by its use of the word 'I' to refer to the author. The text is a collection of mystical writings, including the 'Revelations of Divine Love'. The text is written in a simple, direct style, and is characterized by its use of the word 'I' to refer to the author. The text is a collection of mystical writings, including the 'Revelations of Divine Love'. The text is written in a simple, direct style, and is characterized by its use of the word 'I' to refer to the author.

Margery's text is a Middle English manuscript. It contains 932 words and 59 lines of text. The text is written in a Gothic script and is a translation of the works of Margery Kempe. The text is a collection of mystical writings, including the 'Book of Margery Kempe'. The text is written in a simple, direct style, and is characterized by its use of the word 'I' to refer to the author. The text is a collection of mystical writings, including the 'Book of Margery Kempe'. The text is written in a simple, direct style, and is characterized by its use of the word 'I' to refer to the author.

図) ペアワードの分布 左: Julian 右: Margery

当該の部分の比較で言えば、Julian は中段（章で言えば Ch. 3 の序盤付近）にペアが集中しているのに対して、Margery ではより多くのペアが、万遍なく用いられている様子が見て取れる。

なお、Julianの分布図においてペアワードの分布が少ない部分、いわば「空白部分」（具体的には Ch. 2 の終盤と Ch. 3 の中盤付近）についても詳しく見てみると、別のペアワード的な表現が見られない訳ではない。

まず前半の空白部分には、Julian の著作の根幹にも関わるような、Julian の言説の正統性についての重要な内容が述べられている。

Julian:

Crampton

For the third, by *the grace of God* and *teachyng of Holy Church*, I conceived a mighty desire to receive three wounds in my life; that is to sey, the wound of very contrition, the wound of kinde compassion, and the wound of willfull longing to God.( 66 - 69 )

Colledge and Walsh によると、この表現は “. . . enables Julian to stress that these petitions fully accord with traditional and orthodox teaching ” ( 288. 40 note ) という意図をもって用いられたということである。このように、Julian にとっては非常に重要な語句を意図的に並べて置いたとする解釈は（この表現をペアワードとするかどうかは別として）当該の箇所は決して表現技法の空白ではないことを示唆するものであろう。この考察とは別の議論が必要な部分であるということになるだろう。

対して後半の空白部分では、使用したテキストの基となった写本の異同の問題が大きく関係している。ここは、図式化に利用した Crampton や Glasscoe といった Sloane Manuscripts No.2499 に基づくテキストと、Paris Manuscript に基づく Baker など、ペアワードの現われ方が異なる箇所である。

(1) Crampton

All that was beside the Cross was uggely to me as if it had be mekil occupyed with the fends( 98 - 99 )

Baker

All that was beseid the crosse was *oghye* and *ferfull* to me as it had ben much occupyed with fiendes( 7/11 - 13 )

(2) Crampton

Than came suddenly to my minde that I should desyre the second wounde of our Lords gracious gift, that my body might be fulfilled . . . ( 107 - 8 )

Baker

Then cam sodenly to my mynd that I should desyer the second wound of our Lordes *gifte* and of his *grace* that my bodie might be fulfilled . . . ( 7/24 - 26 )

これには逆のケースもあり、上のリストにある *thy maker* and *Saviour* については、Crampton などには見られるが、Baker や Colledge and Walsh には現れないというものもあった。

ここに述べた2点、Julianの本文の内容、およびテキストとペアの異同という問題の取扱いによっては、当然上で提示したものは別の分布図ができ上がることとなり、ペアワードの分布や頻度に関する印象が変わった可能性はある。もっともここでは全般的に見て、Margeryの方がペアワードに係る表現の比率が高いという、大方の見方に近い結果が出たと言えるだろう。

### 考察3

考察3ではJulianのペアワード表現の中から、繰り返し用いられているものや共通した性質を持つものをまとめ、その特徴について考察を進める。

#### 【音韻の動機付けによるペア】

##### 1) アリタレーション的なペアワード

Baker

*dere worthy death and worshipfull woundes* (11/3)

*suer and safe* (30/31)

in *wele* and in *woe* (31/18 - 19)

Wilsonでは、このように頭韻を踏むような語句の組み合わせの用例が、Julianにおけるペアワード表現(Wilsonの用語で言えばdoublets)の中心であると考えてられていた(99)。Stoneでは、アリタレーションに関してもWilsonとは見解の相違があり(109など)、アリタレーション的なペアワードはJulianとMargeryの両方で多く用いられているとしているが、この点については、本文中ではMargeryにおけるアリタレーション的なペアワード表現のリスト(94-96)が挙げられたほか、巻末のAppendix BおよびCではMargeryとJulianのアリタレーションの例全般についてまとめられるなど、特に詳細に論じられている。

##### 2) 脚韻的なペアワード

脚韻的なペアワードについても *myght and ryght* (Baker, 23/23) など多くのペアが用いられているが、アリタレーション的なペアと併せて、こうしたペアが作られる、または使われる動機としては、共通して音韻があるとするところができるだろう。

下の例は1文中に、前半はアリタレーション的な語句の組み合わせ、対して後半は(andなどはないが)脚韻のペアというように語句が組み合わせられたものである。頭韻・脚韻的な表現がJulianによって自在に用いられていたことの現れではないだろうか。

Baker

This felyng was so *glad* and so *goostely* that I was all in *peese*, in *eese*, ... (25/26 - 27)

また、脚韻的なペアに関連して、以下のように特定の語句の組み合わせが繰り返されることも指摘することができる。

... by the *teachyng* and the *prechyng* of holy church ... ( 18/16 - 17 )

... holy church *prechyth* the and *techeyth* thee. ( 39/10 - 11 )

... holy chyrch *prechyth* the and *techeyth* the. ( 94/24 - 25 )

このように見ると、アリタレーション的なペアの例や、脚韻的なペアの数が多い点などから、Julian においては（もちろん Margery においても同様に）音韻による動機付けがペアワードにおける 1 つの大きな要素であったと言えるだろう。

#### 【章の内容に関連して繰り返されるペア】

Margery のペアワードは、数が多いだけでなく繰り返し用いられている点がその特徴の 1 つであり、例えば *cheer* and *countenance* というペアは Book 1 だけで 7 回、全体では 12 回も用いられている。

対する Julian のペアワードについては、上に述べたような音韻の動機付けによるペアにも繰り返し用いられるペアがあったが、ここではそれとは別に、1 章中などの狭い範囲でも繰り返しが見られるペアについて、それが繰り返される理由を探っていきたい。

#### 1 ) *mercy* and *grace*

このペアを分析するにあたっては、まず Revelation XIV, Ch. 48 の内容について確認しておきたい。

“ *Off mercy and grace and their propertyes; and how we shall enjoy that ever we suffrid wo patiently - xviii chapter* ”  
( Glasscoe 67 )

ここには、これらの 2 語（2 つの概念）について論じられた章であることが示されている。これを受けて本文中には、以下のようなペアワードの用例がある。

Baker

For I behelde the properte of *mercy*, and I behelde the properte of *grace*, ... ( 66/29 - 30 )

Julian はこの直後 “ *mercy* ” と “ *grace* ” の違いについて論じており、Julian においてはこれらの語句は区別されるべきものようだ。しかしながらそのような語句の用法としては、and によって結び付けられたペアワード表現が、別の章でも以下の例のように繰り返し用いられている。

Julian ( Rev. III, Ch. 11 )

Baker

And therto nedyth neyther workyng of *mercy* ne *grace*, ... he usyth workyng of *mercy* and of *grace*. ( 21/3 - 6 )



2) *joy* and *bliss*

ここでは Rev. I, Ch. 4 の例のみを挙げるが、こちらもペアワードとしての用例は多い。

Baker

The Trinitie is our endlesse *joy* and our *blisse* by our Lord Jesu Christ and in our Lord Jesu Christ. (8/13 - 14)

他にも Rev. X, Ch. 24 と Rev. XV, Ch. 64 それぞれで2箇所ずつ見られるなど、頻出する組み合わせである。また、上記 8/13 の例のように形容詞などと結び付いているもの、あるいは Rev. XI, Ch. 25 では順序が逆で用いられた “*blisse* and *joy*” (38/6) もある。

この *joy* and *bliss* というペアについても、Julian が論じている内容と深く関わるような語句についてはペアワードが多いという相関関係を見ることができる。

例えば Ch. 23 においては “a *joy*, a *blisse*, and *endlesse lykyng*” (35/26) など3つ組みになっているような例と、他にも2箇所 (35/32, 36/1) に *joy* and *bliss* が見られる。Ch. 23 は *joy* と *bliss*、さらには *endlesse lykyng* などの概念を区別して論じている章であり、そのことがペアワードとしての *joy* and *bliss* の多用に結び付いたと考えられる。

こうした語句や概念は、Julian の中では区別されて論じられているもので、このような語句からなるペアは「同意語が結びついたもの」と言い切れない面がある。しかしながら、内容に関連して繰り返されるペアに関しては、同意語ゆえに結び付いたのではなく、違いがあるからこそペアという形をとり、繰り返し用いられることによってさらに結び付きを強めていったのではないかと考えている。

## 【Complementaryと呼ばれるペア】

ここで扱うペアは明らかに、多くの研究でペアワードの定義ともなっている同意語（または同意に近い語）が結び付けられものとは異なる面を持つものである。Koskenniemi (1975) では、complementary（または antonymous）と呼ばれるペアワードとして、以下のような例が挙げられている。

of *body* er of *catel*

*bodily* & *gostly* (ともに p. 214 より)

いくつかの研究においては、同意語でない組み合わせのペアは「対象外」となることもあり得るかもしれない。ペアワード考察の対象を、同意語のみの繋がりを越えて広く取るかどうか。このような考察範囲の違いは、おそらく Wilson と Stone の間にもあったと推測され、ペアワードに関する両者の相違を生んだ一因となったと考えている。

もちろん Julian でも、Margery と同様に complementary のペア例を挙げるができる。

Julian:

Baker

for his holie *flesh* and for his precious *bloud* ( 11/2 )

*soule* and *body* ( 11/34 )

*bodely* ne *gostely* ( 25/35 )

oon *bodely* and a nother *gostly* ( 27/28 - 29 )

また、以下のような組み合わせの語からなる例も用いられている。

The *fyrmantente* and *erth* ( 30/6 - 7 )

alle in *generalle* and nothyng in *specialle* ( 51/15 - 16 )

Complementary とされる表現の多くは、現代英語においても馴染みのある表現のため、ともすれば見過ごされる類のものである。このような表現が中世の読者や著者にどのような意味を持っていたのかは疑問であり、なおかつ興味深い問題である。こうした組み合わせからなる語句について、中世英語では表現技法としての機能を積極的に果たしていたのか、それともごくあたりまえの表現として、特に技法として意識されることはなかったのか。これについては今後の研究の余地があるものと思われる。

音韻、内容、そして complementary と、Julian に特徴的なペアワードに関して、3通りの「ペアワードの動機」を分析してきた。なお、この考察で扱われた表現も、当然それぞれの用例が Margery の中にも多く含まれており、こうした3通りの動機のあるなしが両者の間の決定的な違いという訳ではない。しかしながら、Margery のペアワードについては、Koskenniemi (1975) の分析にあるように、おそらくより多くの種類に分類する必要があるものだろう。考察2ではペアワードの「分布」に関して述べたことではあるが、ペアワードの「種類」に関して、Margery では広く、万遍なく用いられている感があり、対する Julian ではある程度の偏りをもって、言い換えれば、いくつかの限定された機能や動機付けによってペアワードが用いられるという傾向があると言えるのではないだろうか。

#### 考察4

この考察4では、Margery の記述による Julian の「言葉」に考察を加えたい。The Book of Margery Kempe には、彼女が Julian と会って談話を交わしたことについて語られた部分がある。2人の談話の中で Julian が Margery に伝えた信仰への励ましの言葉、その中ではどのような表現が用いられているのか。もちろんそれは間接的な記述であって、Julian が実際に用いた言葉にどれほど忠実であるかは正確には確かめようがない。しかし逆に Margery の側から見て、Julian の言葉をどのように「解釈」していたのかに関連して、2人の言葉、特にペアワード表現における特徴の違いが浮かび上がってくると考える。

当該の章 Ch. 18 の中でも2人の談話に割かれた箇所はその一部で、Meech and Allen では p. 42, l. 7 から p. 43, l. 20 がそれにあたる。そのうち Julian の「発言」とされるのは (Meech and Allen, Staley ともに発言の始まりを示す引用符などはない) その内容や Staley (2001) の現代英語訳などから、お

そらく p. 42, l. 24 から p. 43, l. 18 とすることができる。

当該箇所におけるペアワードとしては、以下のようなものを抽出することができる。ここでは用例は Meech and Allen に基づいて引用する。

Meech and Allen

*stabyl & stedfast* ( 42/29 )

*7e rygth feyth & 7e rygth beleue* ( 42/29 )

*vnstabyl & vnstedfast* ( 42/30 )

*contrisyon, deuosyon, er compassyon* ( 42/37 )

*mornynngys & wepyngys* ( 43/2 - 3 )

*askyn & preyn* ( 43/4 )

*mornynngys & wepyngys* ( 43/4 - 5 )

*despyte, schame, & repref* ( 43/15 )

約 30 行 ( Meech and Allen のテキストにおいて ) の中でこれだけのペアが見られることについては、数だけで言えば高い頻度を示すと言えるものだろう。問題は、こうしたペアワードの頻出が Julian 自身の言葉の傾向を反映したものなのか、それともやはり Margery のテキスト特有のものなのか、という点である。そのような問題点については、まずは 1 つ 1 つのペアを詳細に見ることによって明らかにしていきたいと考える。

まず *contrisyon, deuosyon, er compassyon* について。この例のように 3 つの語が結び付けられるものに関しても、多くの場合ペアワードと同じように扱うことはできる。しかし、この表現に関しては別の理由で「Julian のペアワード」とは言い難いところがある。それは、これらを含む複数の語が、Julian の発言に入る直前 ( p.42, l.10 - 11 にかけて )、いわば地の文において、“... compunccon, *contricyon*, swetnesse & *duocyon, compassyon*...” と既に Margery によってペアのように使用されているからである。また、2 箇所ある *mornynngys & wepyngys* は、その表す意味内容から見て明らかに「Margery のペアワード」である。なお Julian の発言箇所のわずかに直前のためリストには載せていないが、*speechys & dalyawns* ( p.42, l.13 ) というペアも Koskeniemi ( 1975 ) にて Margery 独特のものとされている ( 216 )、さらに *askyn & preyn* ( 2 箇所ある *mornynngys & wepyngys* の間 ) 辺りは、Julian が “Seynt Powyl”, “Ierom” そして “Holy Wryt” を引用して語っているところである。

このように見ていくと残るのは、*stabyl & stedfast* や ( これに接頭辞が付いたものであるが ) *vnstabyl & vnstedfast* などの音韻による動機付けがされたペアワードと、その他のいくつかである。これはもちろん推測に過ぎないのだが、このようなペアワードの使用が「Julianらしい言葉」であると、Margery には思われていたのかもしれない。

なお Julian の発言部分と比較して、例えば Ch. 18 だけを見ても、この談話を除く部分で Margery は数多くの、多岐に渡るペアワードを用いている。それを示したのが以下のリストである。

( 談話の前 ) *chargyd & comawndyd* ( 41/1 ) *mercy & gremerc* ( 41/12 ) *help & comfor* ( 41/17 ) *myschevys & dysesy* ( 41/19 - 20 ) *lowly & mekel* ( 41/24 ) *fals feynyng & falshed* ( 41/30 )

( 談話の後 ) mech *enmyte* & mech *dyses*( 43/33 - 34 ) *tryfelys* & *japy*( 44/22 ) *bryte* & *cle*( 44/32 ) *3owr norych* & *3owr comfor*( 45/1 ) *hir lofe* & *hir affecyon*( 45/15 )

以上のようなリストがすぐに出来上がるほど、Margery のテキストを見渡せば多種多様なペアワードの表現に出会うことになるのだが、振り返って Julian との談話部分、特に Julian 自身の発言とされる箇所については、ペアワードの高い頻度を認めたとしても、その種類やヴァリエーションが少ないという感否めない。このような点からも ( Margery から見た ) Julian のペアワードの使用については、数の多少に関わらず、機能が限定されているといった印象である。あるいは、どちらかと言えば音韻による効果を狙ってペアワードを使うことが多かったのでは、など Julian 自身の言葉について想像を巡らすこともできるだろう。

### 結論：ペアワードという観点から

ここまで Julian と Margery のペアワード表現について4つの面で考察してきたが、それらを経て得た結論は、一部 Stone のそれとは異なるものも含まれることになりそうである。

- 1 ) ペアワード的な表現は、Margery だけでなく Julian にも多く見られる。
- 2 ) しかしながらペアワードの数や分布の度合には若干の差があり、Julian では Margery と比較してペアワードの頻度としては少ない感がある。
- 3 ) Julian のペア表現の中心となるのは、アリタレーションなど音韻の動機付けによるもの、各々の章で特に重要な語句 ( 概念 ) を組み合わせる関連付けようとするものや、complementary と呼ばれるものである。
- 4 ) Margery に見られるような多岐に渡るペアワードの使用や、様々な語句が組み合わせられたペアワード表現の例については、もちろん Julian にも見られない訳ではないが、Julian のペアワード利用全体の中でそうしたヴァリエーションが占める割合は少ないように思われる。

表現技法の1つであるペアワードに見られる傾向だけを見て、文体全体の特徴とすることは危険である。またペアワードに関する研究自体にもここで扱うことができなかつた様々な問題が存在する。これらを踏まえてなお Julian と Margery の文体について言えることがあるとするならば、Julian がペアワードを使う方法論は、Richard Rolle との比較の際 Wilson が述べた “ Lady Julian keeps the ornament more strictly in its place ” ( 110 ) というもの、実際にはこれは他の表現技法の利用についての分析であったが、その線に沿ったものと言えるだろう。また Margery のペアワードについて、改めて浮き彫りにされた多彩な表現力は、Stone がその著作を通じて主張した内容と決してかけ離れてはいない。Wilson、Stone 両者の主張は多くの局面で対立するものではあったが、ペアワードを通じて見た場合に限っては、Julian と Margery それぞれの特徴をよく捉えていると考えられる。

## 参考・参照文献

## テキスト

## Julian:

- Baker, Denise N., ed. *The Showings of Julian of Norwich*. Norton Critical Editions. New York: W. W. Norton, 2005.
- Colledge, Edmund O.S.A. and James Walsh S.J., eds. *A Book of Showings to the anchoress Julian of Norwich*. 2 vols. Studies and Texts 35. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1978.
- Crampton, Georgia Ronan, ed. *The Shewings of Julian of Norwich*. Originally Published in *The Shewings of Julian of Norwich*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1994. TEAMS Catalogue: Crampton ( 1994; rev. 1996 ) TEAMS Middle English Texts. 17 Jan. 2007<<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/crampton.htm>>.
- Julian of Norwich. *A Revelation of Love*. Ed. Marion Glasscoe. Rev. ed. Exeter Medieval English Texts and Studies. Exeter: University of Exeter Press, 1993.

## Margery:

- Meech, Sanford Brown and Hope Emily Allen, eds. *The Book of Margery Kempe*. EETS O.S. 212. London: Oxford UP, 1940.
- Staley, Lynn, ed. *The Book of Margery Kempe*. Originally Published in *The Book of Margery Kempe*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1996. TEAMS Catalogue: Staley. TEAMS Middle English Texts. 7 Feb. 2007 <<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/staley.htm>>.

## 現代英語訳

## Julian:

- Beasley-Topliffe, Keith, ed. *Encounter with God's Love: Selected Writings of Julian of Norwich*. Upper Room Spiritual Classics. Nashville: Upper Room Books, 1998.
- Julian of Norwich. *Showings*. Trans. Edmund Colledge O.S.A. and James Walsh S.J. Classics of Western Spirituality. New York: Paulist Press, 1978

## Margery:

- Kempe, Margery. *The Book of Margery Kempe*. Trans. Lynn Staley. Norton Critical Editions. New York: W. W. Norton, 2001.

Bradford, Clare M. "Julian Of Norwich and Margery Kempe." *Theology Today*. Vol.35, No.2, July 1978, pp.153-158. *Theology Today*. Princeton Theological Seminary. 26 Dec. 2006 <<http://theologytoday.ptsem.edu/jul1978/v35-2-article2.htm>>.

- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom, Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975, pp.212-

- 218.
- . "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology Presented to Y. M. Biese*. Ed. Yrjo Blomstedt, Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 1983, pp.77-84.
- Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 1958, pp.209-220.
- Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.
- Wilson, R. M. "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies* 1956, N.S. 9, pp.87-112.
- Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 神戸女学院大学論集 第18巻 第1号、1971年、1-44ページ
- 谷 明信「初期中英語 the ' Wooing Group ' の Word Pairs の用法とその特徴」兵庫教育大学研究紀要 第23巻 第2分冊、2003年、19-24ページ